

## 発表（3） 岩手県におけるスルメイカの不漁と小型化

村上 泰宗（水産技術センター漁業資源部）

### 【目的】

スルメイカは、秋季発生系群と冬季発生系群の2群が資源の主体となっている。岩手県における漁獲量は、冬季発生系群の資源量と連動しており、最盛期には年間30,000トンに達したが、近年は資源状態の悪化に伴い減少し、平成29年以降は3,000トン未満の不漁が続いている。加えて、漁業者からは漁獲物の小型化も指摘されている。

本研究では、本県におけるスルメイカの漁獲動向と魚体サイズ及び日齢の変化を解析し、不漁と小型化の要因について検討した。

### 【方法】

市場月報及び岩手県水産情報配信システムより、昭和41年～令和6年の県内7魚市場における漁獲量データを取得し、平均漁獲量の±20%の範囲を上回る期間を高水準期、下回る期間を低水準期と定義し、類似した傾向を示す5ヶ年（高水準期：昭和41年～45年及び平成19年～23年、低水準期：昭和57年～61年及び令和2年～6年）を抽出して、月別漁獲動向を比較した。また、水産研究・教育機構が整理した「東北海区の水塊指標」及びFRA-ROMSⅡによる水温分布図より、漁獲動向と海況との関係を比較した。さらに、平成24年～令和6年に漁業指導調査船「岩手丸」及び「北上丸」によるいか類漁場探索調査で採集した個体及び釜石魚市場に水揚げされた個体について、外套長と体重の測定及び既往の方法による平衡石からの日齢査定を行った。

### 【成果の概要】

月別漁獲動向を比較すると、高水準期には夏季及び冬季に漁獲のピークがあったのに対し、低水準期では冬季のピークが消失した（図1）。低水準期における冬季の50m深水温は、暖流水の影響を受けてスルメイカの適水温である15℃を上回る傾向にあり、冬季の漁場形成が阻害され、年間の漁獲量が減少したと考えられた。

また、外套長には大きな年変化がなかったのに対し、体重は減少傾向であった（図2）。本県に来遊するスルメイカの日齢はどの年も概ね190～250日の範囲にあり、来遊時期に大きな変化がなかったことから（図3）、成長が鈍化したと考えられた。平均体重と同時期の黒潮続流の平均緯度には強い負の相関が認められ（ $r=-0.89$ 、 $p<0.001$ 、図4）、近年の小型化には水温や餌生物環境の変化が大きく関与したと推察した。

### 【今後の問題点】

黒潮大蛇行の終息に伴い、黒潮続流の北偏が解消した令和7年は、12月の50m深水温が沿岸から沖合にかけて11～12℃となっており、月別の漁獲動向も9月と12月にそれぞれピークが現れるなど、高水準期に近い動向を示した。しかし、依然として平均体重は回復しておらず、漁獲量も低水準期に近い値となったことから、資源状態が十分に回復しているとは考えにくい。また、海況の変化に伴い、今後も漁場形成や魚体に変化が生じると予測されることから、継続的なモニタリングが必要である。

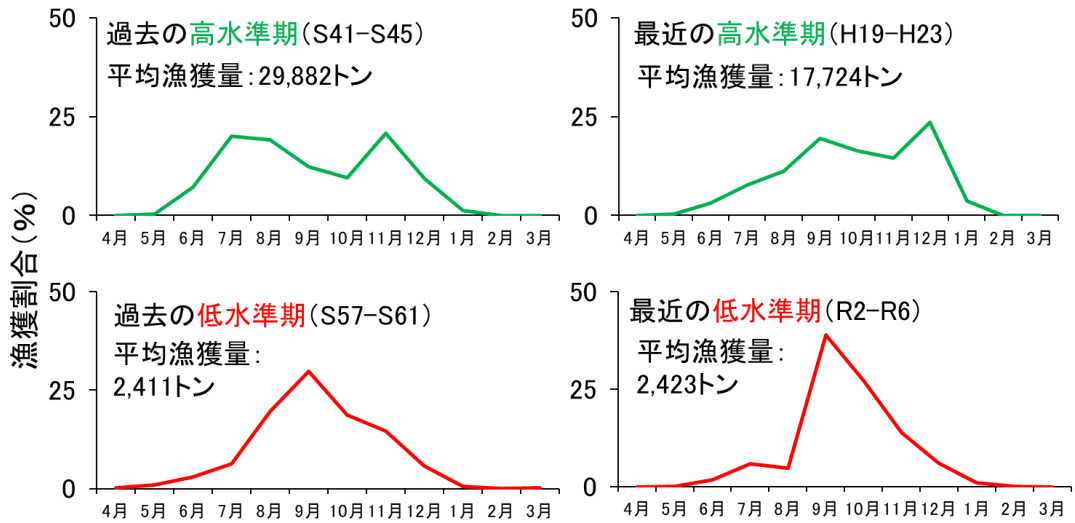


図1 高水準期、低水準期における月別漁獲動向

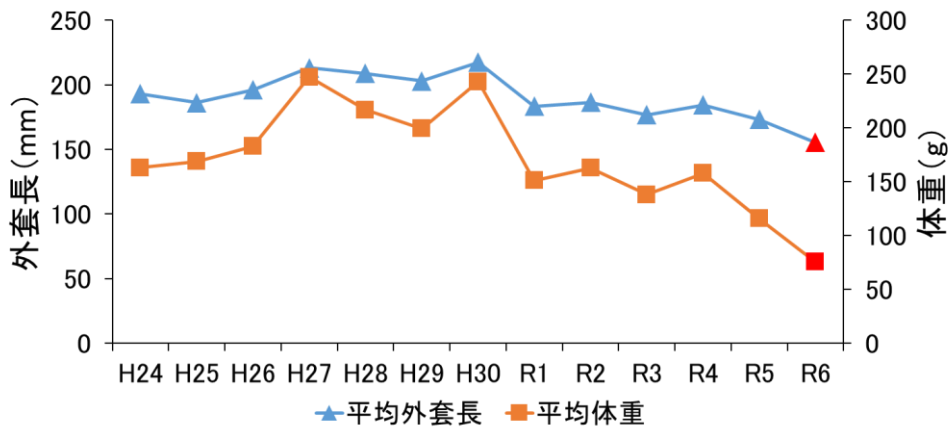


図2 採集したスルメイカの精密測定結果  
※各年6～10月に採集したサンプル

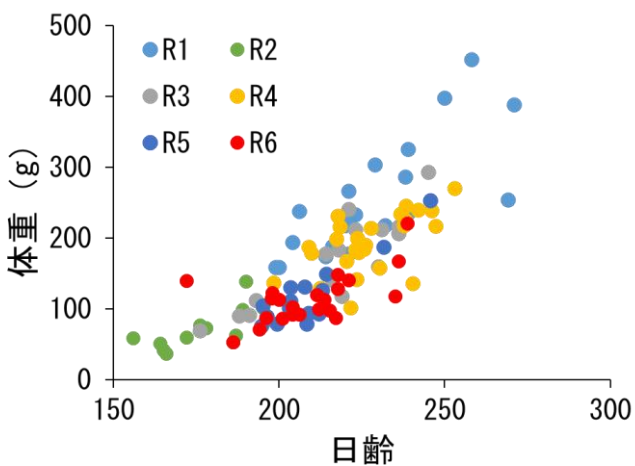


図3 各年9月に採取した個体の日齢と体重の関係

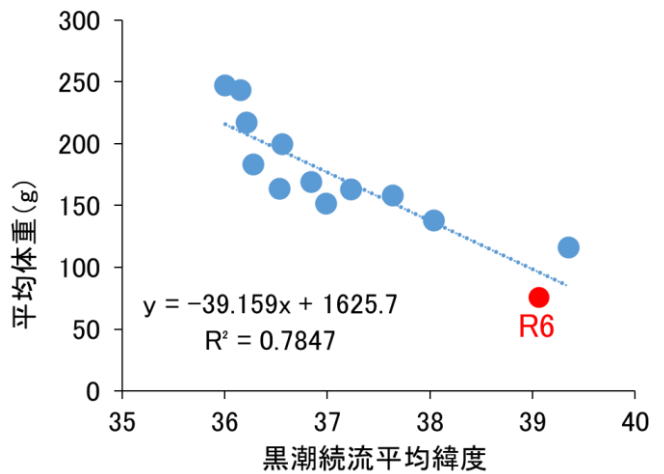


図4 平均体重と黒潮続流平均緯度の関係